

殺意の演奏

大谷羊太郎

殺意の演奏

犬谷羊太郎



著者略歴 昭和6年2月16日生まれ。東大阪市（布施）出身。慶応義塾大学文学部国文科に4年間在籍して中退。音楽プロダクション秀和プランニング勤務。

現住所 東京都港区三田1丁目10-12

殺意の演奏

昭和45年8月20日 第1刷発行

500円

著者 おお たに よう た ろう 大谷 羊太郎

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京 3930

電話東京 (942) 1111 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Yotaro Otani 1970

0093-148630-2253 (0) (文2)

殺意の演奏
目次

プロローグ 作者の独白^{モノローグ}

7

序章 我が棺を飾るもの

9

第一章 暗合の深き淵に

42

第二章 愚者、目覚めたり

91

第三章 来訪者、西より来たる

120

第四章 罨と獲物と罨と

149

第五章 梯子状式思考法

195

第六章 輪舞する論理

213

第七章 虚構と現実の詐術

245

第八章 神、そらに知ろしめす

267

選考経過報告

287

装 幀 稲垣 行一 郎
イラスト 山崎 健志

殺意の演奏

プロローグ

——作者の独白モノローグ

最近、私は、上田敏の訳詩集「海潮音」を読み返してみたのだが、この本の序文中、次のような一節に触れて、興味を覚えた。

一編の詩に対する解釈は人各々或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するにありとす。

この短い文章を眺めているうち、私は、こうした象徴詩風の鑑賞法に、応えられるような小説は書けないものか、と考え始めた。

一編の物語に対する解釈が、読者の好みに従って、少くとも二通りに分かれる。しかし、どちらのケースを採っても、作者が訴えたいテーマは読者に伝わる。つまり、類似の心状を喚起するわけである。

——と、そんなプロットを構想してみたのだ。

しかし、次に私は、自分の考えの矛盾に気付いた。推理小説を志向する限り、私の意図は実現不可能なのである。

推理小説の読者も、未読の部分について、あれこれ独自の想像を楽しみながら、読み進まれてゆくに違いない。この辺までは、象徴詩の読者が、作品を手掛りに詩想の世界に遊ぶのと、本質的にはあまり違いがないように思われる。

だが、問題は結末部なのだ。推理小説を読了した時、上田博士が説くような「読者は種々の解釈を試むべき自由を存す」などという、象徴詩風鑑賞法は通用しない。推理小説では、唯一無二の解決こそが、絶対条件であるからだ。そればかりか、読者の観念の裏をかく、意外性が尊重されるのである。

「海潮音」から掴んだヒントをも捨てず、本編の創作目的をも、そのまま生かすつもりなら、やはり物語の結末部では、あらかじめ埋めておいた手掛りを活用して、象徴詩風小説を、一挙、本格推理小説に変えねばならないと思う。

序章

——我が棺^{ひつぎ}を飾るもの

1

昭和三十×年十一月の末、大阪市都島区中野町、高木吉次郎方の離れで、同居人、細井道夫の死体が発見された。二十一歳になる独り暮らしの青年である。死因は、密閉室内でのガス中毒だった。

検死に駆けつけた係官は、発見者の大学生、村田久光から、細井道夫というのは本名ではなく芸名だ、と聞かされた。死者の職業は、芸能ショーの司会者だったのである。

第一発見者の村田久光は、東京から帰省中のL大二年生であった。細井道夫とは、高槻市内にある高校で同級だった。細井の本名は、杉山重一といった。

村田は、成績もあまり香^{かん}しくなかったし、クラスでも目立たない存在だったが、細井の方は、頭も良い反面、自己顕示欲が強くて、何事にもリーダーシップを握りたがった。

性格の違いが、かえって二人の間の溝を埋めたようだった。お互いの家が、同じ高槻市内で近かったせいもある。よく行き来もしたし、仲の良い友人として、自他ともに認められていた。

大学を受験する時、細井はJ大を狙ったが、身のほどを知っている村田は、同じ私大でも、それよりずっと格の落ちるL大を受験した。

結果は、明と暗とに分かれた。村田は通り、細井は浪人生活に入った。

しかし、細井の自信は、ゆるぎもしないようだった。志望校を一本に絞ったのもそのためなのだが、翌年も同じ背水の陣をしいた。

だがこの年も、再度敗退という憂き目に見舞われたのだった。

自信が強かっただけに、えぐられた心の傷は、浅くないようであった。折から二年に進級する春休みで、村田は高槻の親元に帰っていた。細井の行方不明を知って、すぐ彼の家に駆けつけた。

自殺のおそれさえあるという。うろたえた母親の話を聞きながら、村田もその可能性を、心の中で肯定した。

だが幸いにも、一週間としないうち、細井はひょっこりと帰って来たのだ。知らせを受けた村田は、急いで自宅をあとにした。へどんなに鬱^{ふさ}ぎ込んでいるだろう。村田は、道々、慰めの言葉を探した。

意外なことに、細井は快活な表情で、玄関口に現われたのだった。

「やあ、久しぶりだな」

よく透^{とお}る音質で、声量も豊かである。大柄な体格の上、伸び放題の頭髮と無精ひげとが、山男を連想させた。

しかし、心身の憔悴^{かく}は匿^{かく}せない。目は窪み、肌は荒れて、少し見ないうち、ひどく老けてしまったように感じられた。

「心配したよ。でも、元気でよかったな」

村田が言うと、細井は、済まなかった、と素直に頭を下げた。

二人は、連れだって河原に出た。堤にのぼり、柔かな若草の上に並んで腰をおろした。足許から吹き上って来るそよ風には、まだちょっぴり冬の冷気が残っていたが、霞がかつた山脈の眺めは、いかにも春らしいうらかさに満ちている。

「山を見ると、ほんまに氣持が落着くな。やはり関西や。東京では、どっち向いても濁った色をした空ばかり、背景のない芝居見てるようで、味気ないもんや」

村田は、胸一ぱい、早春の氣を吸い込んだ。

「俺は、その東京で活躍するのが夢なのさ」

細井は、まっすぐ前を向いたままで言った。山の有無に拘泥する村田の地方性を、嘲笑っているようにも聞こえた。細井には、何かのひょうしに、よく人を見下す癖がある。しかし村田の方は、別に腹も立たないのだ。二人のそうした性格の組合わせが、仲違いもなく親交の続いて来た理由でもあったらう。

そう言えば、と村田は思った。細井の一家は、細井が高一の時、父親の転勤で東京から引越して来たのだ。細井が標準語をしゃべるのも、このせいだった。

「村田、俺はな、J大を出て、東京の放送局でアナウンサーになろうと思ってたんだ。しかし、その門口でつまづいてしまったよ。しょせん、運がなかったんだ。だから、大学は諦めることにしたよ」

村田は、おやと彼の顔を覗き込んだ。必ず今度は通る、という確信が見事に裏切られ、精神的な痛手は耐え難かったに違いない。しかし、そうかと言って、簡単に進学を断念するような

細井ではない。エリート意識こそ彼の本領なのだ。唐突な心境の変化が、村田には理解出来なかった。

細井は、勢いづいてしゃべり始めた。いつもこんな風に、会話の主導権は、彼が独占してしまふのだ。それに、細井の舌は滑らかだった。

俺の志望はアナウンサーだが、それも、ラジオ局ではなくて、テレビ局を^{のぞ}希んでいたのだ、と細井は強調した。放送原稿を、ただ正確に読み上げるだけの仕事ではもの足りない、と細井は言った。常に他人の視線を意識している、彼らしい考え方だった。

容姿、マナー、教養、ウィット。視覚に訴える種々の要素が、テレビ局のアナウンサーには求められる。俺は、この新時代に即応した新職業に、人生を托すつもりだった、と細井は語った。

「なるほど、テレビ界とは、ええところに目をつけたもんや。将来性は豊かやから、今後どんなに発展するか判らへん。そやけど、アナウンサーを目指すなら、なおさら、大学で学ぶ必要があると違うか」

細井は訊いてみた。

「志望は変えない、大学には行かない、こう言えば矛盾しているようだが、実を言つて俺は、目的達成の別コースを見つけたのさ。まあ、俺の話も聴いてくれ」

失踪中、何かのきっかけを掴んだのだろう。自殺を危ぶまれた人間が、たった五、六日のうちに、活き活きしたものを身につけて戻つて来たのだ。

どんな内容か、聴く価値はあると思つた。

入試発表の結果を知って、絶望の底に叩き込まれたのは事実だった、と、細井は本心を告白した。やり切れない気持ちになって家を飛び出すと、大阪の盛り場をあてもなくさまよった。夜は西成のベッドハウスに敗残の身を横たえた。死神もとっぴいていたらしく、生への疑問が、泛かんでは消えた。

日曜日の夜である。細井は南にいた。あてやかなショーウィンドの飾り付けに見とれながら、心斎橋筋のアーケードを抜ける。やや空間が展げ、ネオンの光彩は夜空に映えて美しい。細井は雑踏の波に軀をまかせ、千日前の方向に押流されて行つた。

飲物やスナックなどのサンブルケースが出ていたし、若い女の子たちが立話をしていたの
で、初めそこは普通の喫茶店の入口かと思つた。しかし、道路からは内部が見えず、絨毯を敷
いた通路が、奥に向かつて続いているばかりだつた。頭上のどこかにスピーカーがしつらえて
あるらしく、陽気な音楽や客席の拍手が流れて来る。見上げると、建物は窓のない四階建て
で、壁面に取付けた大きな切抜き文字や、出演者たちの絵看板から、これが近頃流行の音楽喫
茶だと知れた。

ぼんやり立止っているうちにも、ひっきりなしに客の出入りがある。二十前後の女性が一番
多いが、アベックや学生の姿も少くない。もっと高年層の男女や、家族連れも見受けられた。
細井も好奇心が動いたが、やはり気おくれがして入りにくかつた。今まで、こうした場所に
来た経験はなかつたし、まして一人である。もう一度、おずおずと内部を覗き込んでみた。

その時、入口辺の壁に貼られた「司会者急募」の貼り紙が目についた。この紙が、釣針の先

につけられた餌の役をしたのだ。ためらいがすいと消え、釣り上げられた魚のように、細井は館内へと吸い込まれた。

「俺はそこで、今まで知らなかった新しい世界を、初めて覗いたんだ。室内装飾も豪華だった。バンドも二カ所、ホールと、それから二階三階を貫通したエレベーターステージの両方で、それぞれ交替出演をしている。上も下も、人の熱気で息苦しくなるほどなんだ。

しかし、俺が感じたのは、そんなことじゃない。あの建物の内部にいた人間——、四階ホールで歌っていた歌手も、伴奏する演奏者も、客席でひしめいていた観衆も、そして階下ではソフトラな音楽が演奏され、飲物を前にしてアベックや家族連れが語り合っていたが、それらの人間の誰もが、実に楽しそうな表情をしていた、という点だよ。

みな、生きているのが幸せでたまらない、という様子だった。俺が身を置いて来た灰色の受験生活とは、何という違いだろう。俺は、目が醒めるような気がした。俺もこの雰囲気の中で暮せたら、同様、毎日を笑って過せるようになるだろう、と考えたね」

細井は、言葉を切って微笑した。村田はその横顔を、黙って眺めた。切れの長い瞳。男にしては珍らしい、陰影かげを伴った濃いまつ毛。意志の強さを示す高い鼻。柔かい感じの口許。ひげの剛さ。

剛と柔とがバランスよく配されていて、まだアカ抜けこそしてないが、男の魅力は充分ひそんでいるようだった。細井自身、それを承知しているのだろう。テレビアナウンサーという、人の前に立つ職業に憧れるのも、無理はないのだ。

細井は、すぐ話の続きに戻った。四階ホールの音楽ショーは実に楽しく、細井は、時の経つのを忘れるほど、出演者たちの熱演に堪能した。なるほど、この場所に来てステージに見惚れ